

妙源寺本「光明本尊」の構成とその意義

安 藤 章 仁

鎌倉時代は、日本仏教史において大きな転換期であった。

その潮流は、旧来からの仏教と新興仏教に大別されるが、後者の中でも天台浄土教から独立して立教開宗した法然浄土教

の門流にとつて念仏相承の正統性を弁証することは大きな課題であった。その問題に視覚的に答えたものが、親鸞が制作

し、中世浄土真宗で流布した光明本尊である。光明本尊と

は、光明を放つ名号や釈迦弥陀二尊、インド・中国・日本における浄土教の菩薩・高僧・先徳を描いた群像で、その上下

部や画中の色紙型に経論釈を銘文として書いたものの総称である。「光明本尊」という名称は今日の通称であり、古くは

「光明品」という呼称が用いられていた。あえて本論で「光

明本尊」の名を用いるのは、光明本尊を全国的に実地調査した『真宗重宝聚英』第二巻（同朋舎出版、一九八七年）が、そ

の名称を用いているからである。光明本尊の現存最古の作例

は、初期真宗教団最古の道場である愛知県の妙源寺に伝来する。本論では、光明本尊の先駆的形態を伝える妙源寺本に考

察の焦点を絞り、日本の中世社会において親鸞がいつ光明本尊を構想し、その構成にどのような意味と機能を持たせたのかを解明する。

一 妙源寺本「光明本尊」の概要

妙源寺本「光明本尊」は、名号部、天竺晨旦部、和朝部がそれぞれ別幅に表装され、三幅一舗である。一連の主題を三種に別幅する形式は、他の光明本尊に類例がなく、唯一である。その構成に基づくならば、妙源寺本は「九字名号並びに三朝浄土教祖師先徳念仏相承図」と呼称するのが至当と言える。各幅とも一枚絹を用い、上下に墨線で枠をとつて賛文を記し、それらの外周に団花文の描表装を巡らしている。その全容と構成は、次の通りである。

中央の名号部は、群生地て仰蓮上に墨線で文字の輪郭をと

り、その中に金箔を置く双鉤填墨で「南无不可思議光如来」の九字名号を書き、その周囲に九十一条の波状の光芒を發し

妙源寺本「光明本尊」の構成とその意義（安藤）

二二

ている。左右両幅は、ほぼ同じ大きさの画面である。左幅は、大勢至菩薩と天竺晨旦の浄土教祖師を配し、右幅には、聖徳太子と四随臣および和朝の浄土教先徳を描く。両幅上下段に配置される賛文に同一の描表装がなされていることから、対幅であることは明らかである。一目瞭然であるが、中央の名号部は、中段が左右両幅より15cmほど長く、また、上下段の描表装の意匠も左右両幅とは異なる。しかしながら、この三幅が一具として制作されたことは、三幅とも画風や体裁が共通し、画中の各銘文が三幅とも同筆であることから認められる。また、妙源寺本以後に展開する一幅本の光明本尊の構成をみれば、そのことは自明である。さらに親鸞没後、約半世紀の開きはあるが、光明本尊の解説書である『弁述名体鈔』を書いた存覚が、妙源寺本を実見し、手控えである『袖日記』に「平田本」として記録している。『袖日記』の現状は、相伝される過程で乱丁や落丁があり、混乱するものであるが、その修復が試みられた結果、平田本が妙源寺本であり、その記載内容から三幅構成であることが判明している。

この妙源寺本の賛銘および札名は、親鸞面授の直弟子である真佛の筆跡であることが確定している。真佛は、『親鸞上人門侶交名牒』の筆頭に記される有力門弟で、親鸞の筆跡に酷似した文字で多くの書写聖教を残している。真佛は、親鸞に先立つこと四年、正嘉二年（一二五八）に歿しているので、

妙源寺本「光明本尊」が親鸞在世中の制作であることは確実となる。したがって妙源寺本は、親鸞在世中に親鸞自身が構想した原本を忠実に再現した唯一の作例ということになる。

二 妙源寺本「光明本尊」の成立時期

では、妙源寺本「光明本尊」の製作時期はどこまで絞ることができであろうか。この点に関して、賛銘中の二つの文言が有力な情報を示している。一つは、天竺晨旦部の札名に「天親菩薩」の尊称が用いられていることである。親鸞は、建長八年（一二五六）に書写された『入出二門偈頌』の冒頭で、「婆藪槃豆は是梵語なり。旧訳には天親是訛れり。新訳には世親なり。是を正と為す」と述べ、以後、著述において新訳を用いている。同種の内容は、『尊号真像銘文』広略両本にも書かれている。したがって、妙源寺本成立の下限は建長八年（一二五六）と断定することができる。

もう一つは、名号幅下段の賛銘にある「獲信見敬得大慶」である。これは「正信念仏偈」の文言で、絶えず推敲が重ねられた一句として著名である。妙源寺本と同文は、建長七年（一二五五）の『尊号真像銘文』（略本）と正嘉二年（一二五八）の『尊号真像銘文』（広本）に引用されており、建長七年（一二五五）に制作される「安城御影」の賛銘にも同文が記されている。

以上のことから、妙源寺本の構想は、『尊号真像銘文』（略

本）が書写された建長七年（一二五五）六月二日から『入出二門偈頌』が書写された建長八年（一二五六）三月二十三日までに成立していたと断定することができる。

ところで妙源寺には、「尊号真像銘文断簡」（以下、「断簡」）が所蔵されている。内容は、「法印大和尚位聖覚真影云」「正信念仏偈」依経段釈迦章の八句「源信和尚銘云」「太子御銘」の四種の銘文である。この「断簡」は次の三点において光明本尊の研究史上、頗る重要である。一点目は、「断簡」の筆跡は原本照合の結果、真佛手跡であること。二点目は、その内容から妙源寺本「光明本尊」の賛銘の草稿本と措定されること。四種の内容が、妙源寺本賛銘に対応していることは言うまでもないが、「源信和尚銘云」「太子御銘」の内容は、妙源寺本「光明本尊」オリジナルの賛銘で『尊号真像銘文』等、出拠は皆無である。このことは「断簡」が妙源寺本光明本尊に直接する決定的な証拠である。三点目は、妙源寺本名号部下段に引用される「獲信見敬得大慶」の一句が、「断簡」では「見敬得大慶喜人」となっていることである。このことは、「断簡」が妙源寺本に先行するものであり、書写時期の下限が建長七年（一二五五）であることを示している。

では、「断簡」の書写時期は、何時頃まで遡ることができるであろうか。この点に関して「断簡」の「正信念仏偈」文に注目すると、「取」は親鸞の前期筆跡の字形、「悪」は後期

筆跡の字形の特徴を示している。このことは、親鸞における前期と後期の筆跡が混在し、親鸞の字形が後期筆跡に成りきっていない段階の原本を書写したことを物語っている。「取」と「悪」の字形について、まったく同じ現象が、親鸞真蹟「紺地十字名号」（三重県専修寺）の賛銘に見受けられる。「紺地十字名号」の制作年代は、完全に後期筆跡で書かれた親鸞八十三歳の「黄地十字名号」（三重県専修寺）より少し早い八十歳（建長四年「一二五二」）前後の時期と考えられている。したがって「断簡」が書写された時期も、「紺地十字名号」と同時期頃と推定することができる。

以上、「断簡」による新知見により、妙源寺本「光明本尊」の制作に先立つ賛の銘文に関する構想は、「断簡」の書写時期が建長四年（一二五二）から建長七年（一二五五）の間に限定されることから、その間から建長八年（一二五六）迄の間が銘文選定の最終段階にあったことが判明する。銘文の断簡という限定はあるが、妙源寺本「光明本尊」の成立に関する過程の一端を窺うことができる。

三 光明本尊成立の背景

妙源寺本「光明本尊」は、その賛銘の草稿本と断定される「断簡」の書写時期から建長四年（一二五二）頃までにその着想があったことが推測される。このことは、光明本尊の成立

を考える上で重要な基点となる。というのは、親鸞は宝治二年（一二四八）に『浄土和讃』と『浄土高僧和讃』を脱稿している。建長七年（一二五五）に『皇太子聖徳奉讃』七十五首を著し、正嘉元年（一二五七）に『正像末法和讃』の草稿が制作されつつある。ここには、親鸞が民衆を意識し、人々に仏教を伝えたいという思いを汲み取ることができる。その思いとともに親鸞の思想も円熟し、一宗を立てる意志に遠かった親鸞は、法然から相承する念仏思想を、壮大な仏教思想の流れの中で位置づけようとした。この点は、親鸞の教学的営為全般からも首肯されるところである。そのことが「正信念仏偈」や『浄土高僧和讃』における七高僧の選定へと結実していく。そして仏教から大乘仏教へ、大乘仏教から浄土教へ、浄土教から日本浄土教へと連なる法流を視覚的に図示することが親鸞における光明本尊を構想する着眼点となる。

この点の動機は、親鸞の行実から複合的に補う必要がある。その外的要因として二つのことが考えられる。一つは、親鸞は法然門下の時代から旧来の仏教教団から「新宗」（「興福寺奏状」第二箇条の失）であるがゆえの批判と弾圧を蒙ってきたことである。この対応として、法然は重源に「浄土五祖図」の請求を依頼したと伝えられ、親鸞においては主著『顕浄土真実教行証文類』において經典の引用にあたっては『大經』の異訳にまで留意し、さらに中国ならびに朝鮮半島の仏

教者にも注目し、積極的にグローバルな経釈文の受容を試み、法然の明かす念仏相承を弁証している。

妙源寺本「光明本尊」の全体構成着想の動機を読み解くもう一つの外的要因は、国内の仏教信仰の動向である。武士が台頭する鎌倉時代は、仏教界にも大きな変革をもたらし、末法到来の時期と相俟って善光寺信仰、聖徳太子信仰、釈迦信仰に代表される仏教信仰が全国的に広まっていた。建久二年（一一九二）善光寺が復興されると、善光寺信仰は急速に広まり、人々の信仰を集めるようになった。浄土教信仰の普及にあわせて観音菩薩の化身と神聖化された聖徳太子信仰も隆盛し、南都復興運動によって釈迦信仰も脚光を浴びるようになる。そしてこれらの中世の仏教信仰の特徴が、「三国伝来」「三尊信仰」といった要素に集約される。聖として北陸、関東、京都の日本中央部を行脚した親鸞は、現実社会に生きる信仰を肌で感じ、光明本尊を構成するにあたっては、その特徴を十全に取り入れたと考えられる。一方、内的要因としては、親鸞帰洛後の関東における親鸞門弟の信仰状況である。建長八年（一二五六）五月二十九日の長男慈信房の義絶に至る「善鸞事件」は、親鸞の晩年に集中する著作や名号本尊制作の契機と考えられている。一連の事件の中には、鎌倉幕府への念仏禁止の訴訟までに発展している。親鸞にとって関東における門弟の異義異端による事態の收拾は喫緊の課題

であり、光明本尊を制作する動機の一つとして数えられる。

四 妙源寺本「光明本尊」の構成と機能

親鸞における光明本尊成立の背景を概観した上で妙源寺本「光明本尊」を眺めると、その構成と機能がよく分かる。まず全体を見通し、妙源寺本から読み解くことのできる三つの構成を捉えてみたい。一つには篤敬三宝（仏法僧）である。名号部が仏を、各幅上下段の賛銘が法、そして左右両幅に描かれる二十体の画像が僧伽である。ここには、仏教の原意趣が視覚的に具現化されている。二つには三国（インド、中国、日本）伝来である。左幅下から上へ、そして右幅下から上へと目線で追えばN字形に法統が流れている。しかも三国ならびに和朝の展開が衣体によって描き分けられているので、その境界が鮮明である。また和朝部については、聖徳太子、源信、法然を中央で一直線に配して日本仏教の展開を明示している。三つには弥陀、観音、勢至の三尊形式である。名号部の「南无不可思議光如来」は、阿弥陀仏の異名である。右幅和朝部の聖徳太子は、観音菩薩の化身である。左幅に聖徳太子と対称の位置に配されるのは、大勢至菩薩である。三国伝来や三尊信仰を盛り込んだ構想が、先に見た国内の仏教信仰の動向を意識したものであることは言うまでもない。このように妙源寺本の三幅一鋪構成には、「篤敬三宝」「三国伝来」

「三尊形式」の三要素が十全に構成されているのである。

続いて妙源寺本の機能について二点考えてみたい。まずここで問題になるのは、妙源寺本のみが、なぜ三幅一具の構成になっているかという点である。この問いに対する答えは、親鸞の伝道方法に起因する。親鸞は九十年という当時、驚異的な長命の生涯の中で一度も寺院を持つことはなかった。なぜならば親鸞の伝道の在り方は、消息に散見されるように一箇所に住住しない聖的教化形態をとっていたからである。聖としての親鸞像は、現存する親鸞寿像の持物にも象徴されている。また、親鸞の教えに集う同朋は、地縁性には基づくが、『歎異抄』に「親鸞ハ弟子一人モモタスサフラフ」と有名な一言が聞き伝えられているように、組織として教団化されるものではなかった。このような寺院を持たない、また、寺院化されていない場所での聖的教化形態では、軽量でコンパクトな礼拝対象が要求された。親鸞が立体的な仏像ではなく、仏名に蓮台を配し本尊とした理由の一つがここにある。妙源寺本の三幅一具の構成は、全体的に大きくても携帯性に富んでいる。つまり、信仰者が集まる場において視聴覚的伝道を行うためのポータブルな内陣や仏壇の機能を有していたのである。この点は、尊像の配置が下方から上方に展開し、天竺晨旦部の椅子に遠近法を用い、平面に三次元の立体配列を意図して制作していることからもうかがわれる。二点目は、

親鸞は尊号と真像を制作するにあたり、宋代の装溝仕様である三段仕立ての構成を用いていることである。しかも、親鸞は大陸で流行する様式を取り入れるだけでなく、上下の引首に仏名の説明や教えの要文を賛銘として記し、視覚的に拝む対象としてだけでなく、教えを聴聞するという新たな機能を付加している。この点から、光明本尊は、親鸞が始めた視聴覚伝道の嚆矢と言える。以上の機能分析の妥当性は、親鸞自筆の六幅の「方便法身尊号」（名号本尊）や二種の「親鸞寿像」（「安城御影」「鏡御影」）の現存類例がその証左となる。

あわせて看過してはならないことは、尊号ならびに真像の図像表現である。親鸞が光明本尊を構想するにあたって国内外の先行する画像を進取したことは、妙源寺本の画の中を見れば判然とする。左幅の中国七祖の手の姿や持物の図様は、「浄土五祖図」（二尊院蔵）を受容していることが明らかである。また、中幅の九字名号における波条帯の光芒は、南宋仏画の影響下にある。親鸞においては思想構築においても顕著であるが、表装形式とともに図像を表現するにあたって宋朝文化を積極的に受け入れていることがわかる。このように親鸞が強く中国大陸の思想や文化を意識する理由は、当時の浄土教徒に求められた課題にあったと考えられる。すなわち蘭溪道隆、無学祖元、栄西、俊芿、道元、幸西門下の明信ら中日仏教僧の交流が盛んになる時局に最先端の中国との関係性を強

調し、法然から相承する念仏の教義的歴史的正確性を立証するためである。親鸞の関心は国外のみに向けられたのではない。そもそも光明本尊の着想の原形は、法然門下で大流行した「撰取不捨曼荼羅」に求められると言える。しかしながら、写本も含めて現存しないため、その全容は明らかではない。文字を本尊とし、双鉤填墨から自筆による墨書の名号本尊を制作する先駆的事例は、法然が源智へ与えた名号や明恵の「杜順禪師香象大師名号」「三宝礼名号」にある。このように親鸞は、国内外の先行する事例を受容し展開させ、光明本尊の構想を実現させていくのである。

光明本尊の成立は、鎌倉新仏教が胎動する中で独自に構想された中世真宗美術の一つの頂点である。絵伝類が親鸞以後に展開するのに対し、妙源寺本「光明本尊」は、親鸞が創始した尊号、真像、銘文を具えた唯一の視聴覚伝道遺例である。その構成と機能からは、親鸞が国内外の先行事例を進取した文化史的意義と親鸞が人々の求める信仰形態を汲みとり、親鸞を取り囲む内外の問題に答えるべく仏教信仰の要である三宝と正しい念仏信仰の相承を視覚的に組み込んだ思想的意義の二つの意義を読み取ることができる。

〈キーワード〉 光明本尊、妙源寺、『尊号真像銘文』、親鸞、真佛

（龍谷大学非常勤講師）